

視聴覚教材利用の問題

国立教育研究所 矢口新

教授課程の諸問題の検討に当って、視聴覚教育の観点から、問題を提起するのが私に与えられた課題である。教授課程というのは何を意味するのか実はよくわからないが、ともかく現代の学習の現実をみて、視聴覚教材の利用という観点から問題を述べてみたい。

私は視聴覚教材の利用ということはもっと活発になってよいと思っている。就中、社会科や理科の学習においてそのことを痛感するが、過去十年のこの利用状況を反省してみると、必ずしも満足すべき状況にないように思われる。勿論、全体として言えば、その利用も相当に進んで来たとは言えよう。しかしその普及の速度は極めて遅々たるものである。また実際に利用されている状況を見ると、必ずしも学習の目的を果すように正しく位置づいていないように思われる。

これには種々の理由があろう。一般にはその原因として施設設備の問題とか、教材ライブラリ体制の不備とか、適切な教材の不足とかが言われているが、より根本的には、学習における見ることの意義についての基本的な理解が成立しないこと、更に言えば、学習の過程において、見ることの具体的な位置づけの研究が進んでいないことにあるのではないかとと思われる。

学習指導ということをおぼえさせることだという考え方は、一般の教師の間にはまだ相当にあるのではないか。実際にそう自覚しているのではないかも知れない。否、観念の上ではむしろその反対の教師が多いかも知れないが、事実、学習指導の課程をみると、そういう考え方をもっているといつてよいような教師は相当に多いのではないかとと思われる。そういう場合に、ただ視聴覚教材を利用するという考え方をたてても、本当に、その本質が発揮されるようにならないのではないか、つまり、見ることを土台にして学習をして行くという形に入って来ないのではないか。

私はとくに、社会科や理科の学習で、視覚材料が使用されることの意義を重くみるものであるが、上のような考え方の教師にとっては、視聴覚材料は、概念をおぼえるための補助手段としか考えられない場合が多い。そのような効果も結果としてないわけではないが、本質的に、見ること、そういう位置づけをすべきではないであろう。近代の自然科学や社会科学の発達をみてもそのことは明瞭であって、見ることを通じて、それらの科学は成立して来たのである。だからみることを通じて法則的な概念や命題がくみだされて来るべきものであり、従って見るとはそういう思考の過程の中に位置づけられなくてはならぬはずである。つまり見て考えるという活動があつて、はじめてこれらの教科の学習の目的が達せられると思う。併し一般にはその点についての考え方が甘いのではないかとと思われる。

つまり何をどう見せて、何を把握するかという点について明確な考え方が成立していない場合に、視聴覚材料が用いられるということはそれほど効果が上らないと思う。否、場合によっては無意味なこともある。例えば或る教材映画で、地球は公転と自転をしているということを説明する映画がある。この言葉をそのまま模型を使ってフィルムにうつしたようなものであるが、これをただ見せることは自然科学の学習とはならないのではないか。自然科学が地球の公転や自転を発見したのには、非常に長い期間の観察と理論的考察があったわけであって、そこに一つの法則的概念が成立したのであろう。その思考のプロセスを体験することが、理科の学習指導の目的であろう。視聴覚材料はその際に、集約的に観察の材料を提出することが出来るのである。そういう材料を提出して概念や命題の根拠となる事実を見せ、それらから理論的に概念や命題を把握して来るというのが自然科学の学習である。所がただその結果としての概念を絵画化したような材料では、考える所もなく空虚な概念をそのまま絵にしているだけである。このような教材が現にあることは、直接は視聴覚材料の製作にも問題があるが、その根底には、何のために何を見せるかということについての究明が足りないことが原因であって、現在の視聴覚教育というものもっている弱点であると思う。

こういう点から、視聴覚教育は理科の学習には不適切であるということも主張されるのであって、それは現象時には確かにそうである。しかし、本質的にはこの理論は成立たないのであってつまり何をどうみせるかについての科学的な指導の過程が考えられていれば、そこには、映画的手法というメカニズムを利用した教材も多く使用出来る。例えば、前に述べたと同様な領域の教材映画であって地球からみた惑星の一年間の見え方の軌跡を映画につくったものがある。これは一年の動きを僅かの時間に集約してとってあるから、明瞭にトリックであるが、そこには、考えるための材料が提出してあるのである。これを二年間に亘って観察することは、普通の学習では出来ない。そういう点から考えると、自然科学に於ても視覚教材は使用出来るのであって、自然科学は観察と実験のみであると言う必要はない。しかし、この教材は前の教材とは根本的にちがった態度で製作されている。つまり、何を見せて、何を考えさせるかという点についての考察が根本にあるのである。このような態度であれば、視覚教材を使用することは、子供の思考力を弱めるということにはならないと思う。しかし一般にはこういう考え方が多いのであって、それは、根本的には視聴覚教育というものについての考え方の甘さの問題である。つまり、見せるという一般的方法論だけしか考えられず、それぞれの教科の学習のプロセスでの教材の問題として究明がなされないからではないかと思う。つまり視聴覚教育という言葉が解消して、教授の過程の問題として、具体的教材の提出ということがもっと考えられなくてはならぬ。